

# 腹部画像診断における画像と病理の対比 —画像診断医が知っておきたい病理の知識—

企画・編集：小山 貴 倉敷中央病院 放射線診断科

## 序 説

今回の増刊号のテーマとして編集部からいただいたテーマは「画像診断医が知っておきたい病理の知識」という難題でした。あらためて考えてみると病理の知識が得られたとしても、画像診断医がそれを実践的なものにするためには病理に対応する画像があつてこそということに思い至るのです。

最近では画像診断のみならず生検の技術の発展もあつて、さまざまな病変に対して画像ガイド下に生検が行われる機会も増えつつあります。生検例においては病理は限られた検体から診断を考える必要がありますが、画像所見がマクロ病理としての役割を果たす機会も少なくなく、ますます画像診断医と病理医の連携が重要性を帯びるものと思われます。

そこで、本書においては各論を同一施設の画像診断医と病理医にご担当いただき、さまざまな症例を先生方を選んでいただいたうえで、「画像所見」を画像診断医に、「病理所見」を病理医に解説していただくことをお願いさせていただきました。日常で遭遇する機会の多い疾患から、画像と病理を合わせることで最終的な診断にたどりつくことができるような難解な症例も含まれますが、いずれも画像所見の裏付けとなる病理の知識を学ぶことに意義のある症例ばかりと思われます。

「概説」では病理の先生方に画像診断医が知っておくことが望まれる病理の知識という内容で、自由にテーマを選んでいただき執筆をお願い致しました。いずれの項目も予想をはるかに超える素晴らしい内容であり、従来の特集にはない魅力的な内容となっていると思われます。「後腹膜」の項においては僭越ながら当院の能登原憲司先生との共著で小生が後腹膜線維症について拙稿をしたためさせていただきました。

私事になりますが能登原先生とは偶然にも2001年にほぼ時期を同じくしてミネソタ州はロチェスターにあるメイヨー・クリニックに留学し、筆者が帰国する際にいつか一緒に働くことができればと病院の玄関で手を振って別れたのです。その夢がまさか実現するとは思いませんでしたが、筆者が倉敷中央病院に赴任して以来、十年の長きにわたり毎週、画像と病理の対比の充実したカンファレンスを行うことができたのです。画像診断医としては実に恵まれた環境であると同時に、数多くの症例で画像診断医と病理医が連携することの重要性を再認識する日々でもありました。

本特集が画像診断医にとって画像と病理の対比から学ぶことの楽しさ、悦びを知る一助になればと願うばかりです。

小山 貴